
君と恋できない

みねらる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君と恋できない

【Nコード】

N3115F

【作者名】

みねらる

【あらすじ】

「あなたの瞳のその意味に気付くとき、私がもう少し大人だったなら。」幼馴染な自分のお隣さんに恋する大切な友達。その恋を応援しながら自分の気持ちを見つめなおしたらそこにあったのは目をそらし続けてきた現実

1話

頬を染めてその秘めた思いを語ったかけがえのない友に

私は笑顔で応える

「大丈夫、きっと叶うよ」

そして

嬉しそうに笑ったその可愛い人を

心底

憎らしく思った。

じわじわと日差しの照りつく初夏の午後、母親に頼まれて仕方なく庭の掃除をしていると後ろから聞きなれた声がかかった

「ひかるう」

気だるげなその声に苦笑しながら振り向く

「ゆう。」

隣に住む優喜が2階にある自分の部屋の窓から休日独特のだらりとした空気を纏ったままに私に視線をよこしている。

「なに、今起きたん？」

「ん」昨日大学の先輩がさあ飲みにつれてってくれたんやけど、なかなか帰してくれんでさあ」

ぼわんとあくびをしながらもそもそとしゃべる。あはつと軽く笑って「そりゃきちんと断られへんゆうが悪いわあ」と流すとむっとした顔で反論を返してくる。

「そんなん、先輩の誘い断れるかあ？」

だいたいなあぼくは光みたいにはつきりモノよう言わんねん・・ぼそぼそ繰り出される言い訳を軽くいなしてもう一度ほうきを握りなおす。

するとふと真面目な顔に戻った優喜が少し低い口調でたずねてきた

「ひかる、そつえばこの間コクられたって聞いたけど。」

あわあわと離しかけたほうきをもう一度しっかり掴んだ

「いや、はあ、まあ・・・」

くそう 誰だチクリ魔は！胸の中でそう毒づく。

「で？どうしたの」

窓枠に頬杖をついてニコニコと楽しそうなかからかい口調で訊いてくる。けどその眼は少しも笑ってなんかいなくて不機嫌さを隠そうともしない。

少しの怖さと照れを感じて俯いた。

「あ、いや・・・まあ、はい。断りました。」

まだ目を合わせられないままそう言う

「なあんや、もったいない。そんな奇特な人なかなかおらんでえ？」

さつきと同じような明るいからかい口調で憎まれ口が帰ってきた。

思わずむっとして顔をあげるとさつきとは違う優しげな瞳に出会ってしまい、うっかり赤くなったであろう目元を隠すために慌てて片付けるべき土埃を睨みつけた。

最近、こんな風に話するのにひどく緊張してしまうことがある。下を向いていても優喜が未だじっとこちらを見ているのを感じとってまた顔が熱くなった。

優喜はまだ私が小学生のころ引越してきた1つ年上の男の子だ。はじめてあった頃には私よりずっと低かった背が今はすっかり抜か

されてしまい、なんだか男っぽくなって少し戸惑う。

でも、1番の戸惑いの原因はそんなことではなかった。問題は、彼が私に好意を寄せているということである。

告白されたわけではない。

それらしいロマンチックな会話になることだってない。

大抵いつも先ほどのようなどうでもいい会話をぼんぽんと投げ合う、そんな気楽な間柄だった。

お隣さんだし家族同志仲も良かったので必然とよく遊ぶようにもなった。

頭もよくて運動もできる優喜は私の憧れのお兄ちゃんのようにもあった。

そんな心地よい関係になんか違うものを感じ取ったのは私が高校を卒業するころ。

ふとした瞬間にこちらを見つめる瞳が真摯なものになっていたり、私の名前を呼ぶその声が「隣のお友達」を呼ぶものとしてはひどく甘いものだということに気づいた。

くりっとした大きな優喜の目が雄弁に何かを物語る。

それに気づいて啞然とし、何かの間違いだろうと自意識過剰な自分を恥じたのがもうずっと前のことに感じる。

その考えを打ち消すには優喜の眼はあまりに正直すぎたのだ。

でもきつと今は何も言ってこない。
その確信も確かにあった。

彼は今私との距離を測ろうとしている。私の気持ちを推し量っているのだろう。

「私の気持ち・・・」
塵取りを手にしながらぼそつと呟いた言葉に優喜が「なんか言った？」と首をかしげる。それに曖昧に首を振りながら考えた。

まだ私は優喜への気持ちを自分でも理解できずにいた。
好きか嫌いかで言えばもちろん好きだ。昔からの憧れの人であり仲の良い友達なのだからそれは当然。

「でもそういう好きなのかって聞かれるとなあ」

途方に暮れる気持で太陽の照りつける空を仰ぐ。ちょっとせっかちな蝉がもう鳴いている。

急に暑さを思い出したと同時に汗がつうつと首筋を流れた。

「あつちい」

「顔真つ黒なんで」

呆れたような優喜の声が耳の奥で蝉のけたたましいラブソングと混

じつ
た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3115f/>

君と恋できない

2011年1月11日15時30分発行